

# 『安倍内閣の五年間の外交・安全保障の実績とこれからの課題』

——シンガポール国立大学 EMBA コース——

2017年11月12日

京都産業大学・世界問題研究所長

東郷和彦

## 安倍外交：2013年～2017年までに積み上げてきたこと

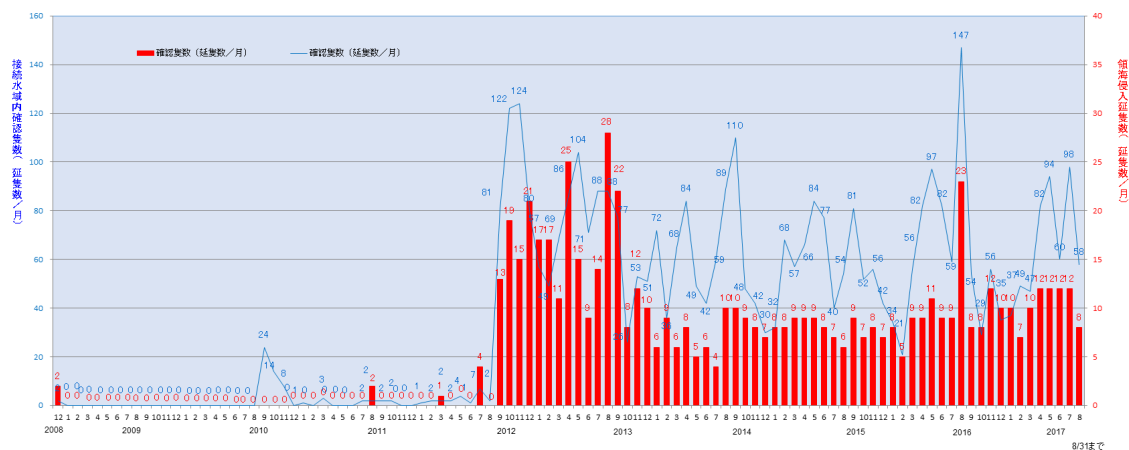
いくつかの政治的信念＋ダンボの耳＋戦略的な考え方をもっている。

＝時間と空間を考えて、重要なものから、一つ一つ解決していく。

「積極的平和主義」：「地球儀を俯瞰する外交」

		2013年	2014年	2015年	2016年	2017年
中国	抑止	安保組織				
尖閣①		防衛予算				
靖国	対話	靖国参拝	4点合意			
			北京会談	ネシア会談	杭州会談	Hamburg 会談
米国	平和安全法制②		解釈変更	立法化	法律施行	
	歴史和解			両院演説	オバマ広島	
					安倍ハワイ	
歴史認識	中国・韓国			70周年談話③		中国との共存⑧?
	韓国			慰安婦合意④		
ロシア		代表団訪問	ウクライナ X	ウクライナ X	ソチ⑤	継続・停滞⑦?
北朝鮮						核ミサイル⑥?

### ● ①2012年9月民法上の所有権の国への移転→尖閣諸島領海問題



- ②平和安全法制（15年9月19日） 集団的自衛権の行使「我が国と密接な関係にある他国に対する武力攻撃が発生し、これにより我が国の存立が脅かされ、国民の生命、自由及び幸福追求の権利が根底から覆される明白な危険がある」これが自衛権行使の「新三要件」の最重要点（14年7月閣議から）
- ③安倍談話（15年8月14日）「我が国は、先の大戦における行いについて、繰り返し、痛切な反省と心からのお詫びの気持ちを表明してきました。。。こうした歴代内閣の立場は、今後も、揺らぎないものであります。。。」「戦争に関わりのない私たちの子や孫、そしてその先の世代の子どもたちに、謝罪を続ける宿命を背負わせてはなりません。しかしそれでもなお、私たち日本人は世代を超えて過去の歴史に正面から向き合わねばなりません。謙虚な気持ちで過去を受け継ぎ、未来へと引き渡す責任があります」
- ④慰安婦合意（15年12月27日）「安倍総理は、内閣総理大臣として改めて、慰安婦として数多の苦痛を経験され、新進にわたり癒しがたい傷を負われた全ての方々に、心からお詫びと反省の気持ちを表明」＋韓国財団への10億円の拠出。「最終的かつ不可逆的に解決」。
- ⑤東京プーチン記者会見（16年12月16日）「これらの領土の歴史的なピンポンをやめねばならない。日ロの根本的な利益が最終的で長期的な解決を求めていることを理解しなければいけない。－私の意見では、平和条約の締結が最も重要である。なぜなら、このことが、歴史的な展望に立ち、中期的に私たちに長期的な相互関係の条件を創るからである」  
→「共同経済活動」をまずやってみる。経済と安保も重要。
- 2017年6月から7月、内閣支持率が、調査によっては30%をきる。森友学園の小学校建設への安価土地提供・加計学園獣医学部建設への政治圧力・稲田防衛大臣下の防衛省問題。→安倍総理の「謙虚」発言と8月初め内閣改造 → 支持率低下にはどめ → 9月28日解散 10月22日総選挙勝利
- 北朝鮮：⑥安倍国連演説（17年9月20日）「対話が続いた間、北朝鮮は、核、ミサイルの開発をあきらめるつもりなど、まるで、持ち合わせていなかったということでもあります。対話とは、北朝鮮にとって、我々を欺き、時間を稼ぐため、むしろ最良の手段だった。－必要なのは対話ではない。圧力なのです」

選挙戦における安倍演説（17年10月10日）「北朝鮮の側から「政策を変えますから話し合しましょう」と言ってくる状況をつくらねばならない。必ずこの問題を解決するために全力を尽くす」  
→トランプと金の舌戦→北は「核 ICBM」を持つ→戦争になる？→日本の総理はなぜ、何をしなければならないか？

- ロシア：⑦交渉は、進展か？停滞か？
  - 安全保障と北朝鮮の問題で、日ロの相互理解と提携が造れるか
  - 「制裁」下で今日極東・東シベリアで協力できるか
  - 「共同経済活動」から「主権の問題」の解決に至れるか
  
- 中国：⑧習近平第二期政権 → 国内的には習近平への圧倒的な権力集中・国際的には米国と拮抗・凌駕する超大国へ → 米中はアジア最大の緊張要因 → 日本の位置はどこに？
  - 歴史・安保問題が一層困難になっている。
    - 上海師範大学「中国慰安婦問題研究センター」他
  - 「一带一路」のユーラシア新共同体→＜経済からの協力＞
    - AIIB・NDB・シルクロード基金
    - 上海協力機構(SCO)・アジア相互協力信頼醸成会議(CICA)
    - 中国海軍戦略（西太平洋からインド洋）
  - <新しい発想> 東郷和彦・森哲郎・中谷真憲編著  
『日本発の「世界」思想』哲学・公共・外交』（2017年藤原書店）

Japan's pre-war philosophy of "Kyoto School" led by Nishida Kitaro had its basis in Western Philosophy and 13<sup>th</sup> century Zen Buddhism. Contemporary Kyoto School scholars are finding their way in Martin Heidegger's study backed up by Zen meditation. The book tries to bridge them with contemporary experts on public policy and foreign policy. It has gathered 20 scholars of diverse nationality from the three disciplines of philosophy, public policy and foreign policy to seek a place of "Thinking emanating from Japan" in resolving new issues which divide the world today, as follows:

Contemporary world is heading to a Realist world where power counts, but where each side amplifies and justifies its power by its legitimacy and justice, often backed up by nationalism and populism. The book proposes to give philosophical thought to the "place" where power and justice collide. The book recommends accepting that "place" in its entirety, and detecting a fine breezing space there so as not to be suffocated by an exclusive power and justice. Japan's historical experience of once accepting different civilization and yet at some point switching it to something of its own and universal may give a hint to detecting this breezing space.